

此岸(迷い)と彼岸(悟り)

令和六年三月法話 薬師寺管主 加藤朝胤

佛教は、お釈迦様(ゴータマ・シッダールタ)一般に佛陀(目覚めた人)の説いた教えで、自ら佛陀になる為の教え

佛教誕生の地であるインドの世界観は、輪廻と解脱の考えに基本

人の一生は苦であり、永遠に続く輪廻の中で永遠に苦しむことである

その苦しみから抜け出すことが解脱であり、修行により解脱を目指すことが初期佛教の目的であった

お釈迦様の思想には偶像崇拜の概念は無い

經典に登場する諸佛や諸菩薩に対する信仰を帯びようになるが、根本的には信仰対象に対する絶対服従を求めている

佛教における信仰は帰依と表現され、修行者が守るべき戒律を保つために神や靈的な存在との契約をするという考えも存在しない

1

輪廻転生(りんねてんじょう)

佛教においては、生前の業(ごう)によって次の輪廻の転生先が決定するとされている

六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人)に基づき生前に良い行いを続け功徳を積めば、次の輪廻では善果を得、悪業を積めば悪果を得る

因果論(いんがろん)

佛教は、物事の成立には原因と結果がある(縁起の法)

生命の行為・行動にはその結果である果報が生じるとする因果論があり、人の行為を善業と悪業に分け(善因善果・悪因悪果)、人々に悪業をなさずに善業を積むことを勧める

個々の生に対しては業の積み重ねによる果報である次の生、すなわち輪廻転生を論じ、世間の生き方を脱して涅槃を証さない(悟りを開かない)限り、あらゆる生命は無限にこの輪廻を続ける

因縁生起(いんねんじょうき)因縁(いんねん)縁起(えんぎ)

この世の万物は、複雑な因果がより合わさった関係性によって成り立っている

苦の原因と解決法

人の世は苦しみ(生老病死の四苦)に満ち溢れている。そして、あらゆる物事は原因と結果から基づいているので、人々の苦しみにも原因が存在する

したがって、苦しみの原因を取り除けば人は苦しみから抜け出すことが出来る

佛教では生きることの苦から脱するには、真理の正しい理解や洞察が必要であり、そのことによって苦から脱する(悟りを開く)ことが可能である(四諦 苦・集・滅・道)とするそれを目的とした出家と修行、また出家はできなくとも善業の実践を奨励する(八正道)

佛教では、救いは超越的存在(例えば神)の力によるものではなく、個々人の実践によるものと説く

2

信仰の代償を求めない

お釈迦様は一部の宗教が説くような「私を信じなければ不幸になる 地獄に落ちる」という類の言説は一切しておらず、死後の世界よりも現在の人生問題の実務的解決を重視している

苦悩は執着によって起きるということを解明し、それらは正しい行ない(八正道)を実践することによってのみ解決に至るという極めて常識的な教えを示す

佛教の存在論

佛教そのものが存在を説明するものとなっている 変化しない実体を一切認めない

衆生(生命・生きとし生けるもの)と生命でない物質との境は、ある存在が識(認識する働き)を持つか否かで区別される また物質にも不変の実体を認めず、物理現象も無常、すなわち変化の連続であるとの認識に立つ

三 学(ざんがく)

悟りに至るための目的別の分類

- ① 戒(かい) 律により身心を惑わす世俗の物事から離れる
- ② 定(じょう) 身心をコントロールする
- ③ 慧(え) この世の真理を見極める事で身心に平穩をもたらす

四 諦(したい)

悟りに至る道筋を説明するために、現実の様相とそれを解決する方法論をまとめた四聖諦

- ① 苦諦(くたい) 苦という真理
- ② 集諦(じつたい) 苦の原因という真理
- ③ 滅諦(めつたい) 苦の滅という真理
- ④ 道諦(どうたい) 苦の滅を実現する道という真理(八正道)

八正道(はつしょうどう)

釈迦の説いた悟りに至るための実践手段 修行を実践するに当たっての行動別の分類

- ① 正見(しょうけん) (慧)
- ② 正思惟(しょうしゆい) (定)
- ③ 正語(しょうご) (戒)
- ④ 正業(しょうごう) (戒)
- ⑤ 正命(しょうみょう) (戒)
- ⑥ 正精進(しょうしん) (戒)
- ⑦ 正念(しょうねん) (定)
- ⑧ 正定(しょうじょう) (定)

十二因縁(じふにいんねん)

① 無明(むみょう) 現象が無我であることを知らない根源的無知

- ② 行(ぎょう) 潜在的形成力
- ③ 識(しき) 識別作用
- ④ 名色(みょうしき) 身心
- ⑤ 六入(ろくにゅう) 六感覺器官
- ⑥ 触(そく) 接触
- ⑦ 受(じゆ) 感受作用
- ⑧ 愛(あい) 渴愛
- ⑨ 取(しゆ) 執着
- ⑩ 有(う) 存在
- ⑪ 生(しょう) 出生
- ⑫ 老死(ろうし) 老いと死

四法印(しほういん)

諸行無常 一切の形成されたものは無常であり、縁起による存在としてのみある

諸法無我 一切の存在には形成されたものでないもの、アトマンのような実体はない

涅槃寂静 苦を生んでいた煩惱の炎が消え去り、一切の苦から解放された境地が目標である

一切皆苦 一切の形成されたものは、苦しみであり、佛教誕生の地であるインドの世界観は、

輪廻と解脱の考えに基づいている

毒矢の喩え

その男はお釈迦様に、この宇宙はどうやって出来ているのか、人間はどこから来て、死んだらどこに行くのか、靈魂はあるのか、死後の世界はあるのか、極楽や地獄はあるのか、等と尋ねてみた所、お釈迦様は、「自分はそうした質問には答えない、お前は目の前で毒矢に当たって苦しんでいる男がいるのに、その毒矢がどこから飛んで来たのか、その毒は何なのか、その毒矢は誰が放ったのか、そういうことを訊くのか、そんなことよりも、目の前で毒矢に当たって苦しんでいるその男を救ってあげることの方が大事ではないか」と説いた(毒矢の喩え『マッジマ・ニカーヤ』(中部経典)第63経「Cula-Malunkhyovada Sutta」(小マールンキヤ経))